

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 24 日現在

機関番号：32686

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520586

研究課題名(和文) 多文化共生を再考する：多言語アイデンティティを肯定できるコミュニティに向けて

研究課題名(英文) Rethinking Multicultural 'Kyosei' in Japan--Toward a Community which accomodates Multilingual Identities

研究代表者

藤田ラウンド 幸世 (Fujita-Round, Sachiyo)

立教大学・異文化コミュニケーション研究科・特任准教授

研究者番号：60383535

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、外国籍児童が「多文化共生」の理念を掲げる自治体コミュニティで育つプロセスを追った研究(藤田ラウンド2009, 2010)から始まった。

「理念」としての多文化共生と多文化が混在している「現実」との乖離、「多文化共生」は決して一枚岩ではない。どの立場から何を語るかにより異なる「多文化共生」が存在し、一つの静的な現象、事実、理論、システムとして捉えること自体が難しい。現在の日本社会においても多文化に関わる「個人」と「社会」の変動は互いに影響を与え、多文化共生は常に流動的(fluid)である。2014年9月のシンポジウム(<http://www.multilingually.jp>)報告を参照。

研究成果の概要(英文)：This research project sprang out of Fujita-Round's previous studies (2009, 2010), which focus on foreign children's Japanese as a second language development in a local community which embraces 'multicultural co-existence'. There tends to be a distance between the 'concept' of multicultural co-existence and the 'reality' of multicultural residents; thus this concept of 'multicultural co-existence' cannot have one definition. What the person says about 'multicultural co-existence' is not always commensurate with the position from which it is said. Within Japanese society, we see multicultural co-existence is always fluid and the result of the way the individual and society influence each other. (See Symposium Report of September 2014, <http://ww.multilingually.jp>).

研究分野：社会言語学 応用言語学 言語学

キーワード：多文化共生 Multilingualism バイリンガリズム 言語の多様性 言語とアイデンティティ 社会言語学 第二言語としての日本語 JSL Language revitalization

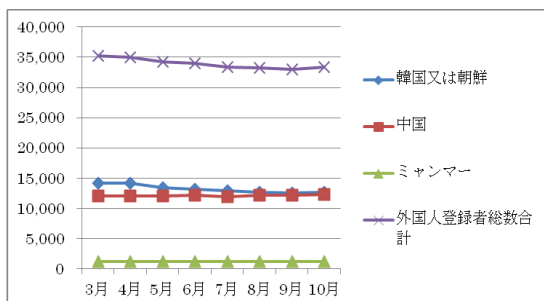
1. 研究開始当初の背景

(1) 多文化共生の問い直し

21世紀のグローバル社会は、社会の変動と国を越えた人の移動をもたらした。1960年代からの高度成長期、1970年代以降の経済発展期を経て、先進国に仲間入りをした日本は、経済成長の維持と国内の少子化による労働力不足の解決策として、1990年に日系人を労働者として受け入れるための入管法改正を行った。これにより、日本も多言語・多文化を受け入れる「多文化共生」を目指す社会になると思われた時期もあったが、川村(2008)が「人口減少時代において外国人の定住に伴う移民受け入れを不可避としながら、よそ者と捉えられがちであるエスニック・マイノリティへの不信や疑いのまなざしが正当性をもつという矛盾を抱えている」と指摘したように、多文化共生という概念と実際の外国人の定住化とが乖離していることが否めない現実がある。1990年から四半世紀たった今現在でもこの「乖離」は継続している。本研究課題では、「多文化共生」に関わる概念、その概念が反映されている実践について、マクロとミクロの切り口から問い直し、日本社会の中での「多文化共生」という意味の構築の3つに焦点をあて社会言語学の視点から整理する。

(2) マクロの要素：多文化が交叉する新宿

2009年度の新宿区外国人登録者数では、新宿区の久保・百人町地域は3人に一人が外国人登録者住民であった。しかし、2011年3月11日の東日本大震災とその震災による原子力発電所事故後は、新宿区における外国人人口に変動が起こりつつある。外国人人口は緩やかに減少しただけではなく、国籍別では常に一番であった韓国または朝鮮国籍の集団が中国国籍のグループに抜かれようとしていた。この新宿区の外国人人口の変動はまさに日本全国の外国人人口の動向において、2007年度に「中国」が韓国併合以降、強制労働を中心とした理由で日本に在在していた韓国・朝鮮の在日オールドカマーが支えてきたエスニックマイノリティ・グループを抜いたことと重なる。(下記のグラフの出典：新宿区外国人登録者数国籍別(2011年3月1日～10月1日)資料、新宿区公式統計資料ウェブサイト)



(3) ミクロの要素：学校教育と日本語学習支援

本研究代表者は新宿区を2002年から調査地とし、外国籍の子どもの教育について調査を行っている。(2)でも挙げたように、日本国内で外国籍人口比率が最も高い新宿区について、「人的移動」をマクロ、また、「日本語教育・日本語学習支援」をミクロと位置付け、この両面から新宿区の言語教育を社会言語学から考察し、外国籍住民の子どもの教育の課題を明らかにした(2008, 2010, 2011)。中でも、藤田ラウンド(2008)の論文では、新宿区における、日本語の初期指導、日本語学級・日本語教室、放課後日本語学習支援の実態について教育委員会を始め、現場の教員、NPO団体の支援者、ボランティア教師たちへの直接のインタビューをもとに第二言語としての日本語と学校外での日本語初期指導や放課後支援について報告し、新宿区に転入する外国籍の子どもに関わる言語環境について論じた。この調査は2002年から2008年までの調査を主にまとめたものであることから、本研究では、新宿区の日本語教育場面からさらに「多文化共生」へと研究課題を拡げ、(2)で挙げた社会変動を確認しながら、2010年代以後の新たな多文化共生につながる教育課題を探ることを目指した。

(4) 子どもの言語アイデンティティ

新宿区に住まう外国籍住民は21世紀では常に120前後の国籍数を数えるほど、多文化が混在している。外国籍の子どもに関していえば、義務教育にある子どもに対して、日本語は第二言語、もしくは外国語という位置づけになる場合が多く、子ども自身の母語は例えば120の国籍の子どもがいればそれ以上の言語の子どもたちがいることになる。こうした多様な子どもの母語と母文化を尊重しながら、日本社会の中でどのように社会言語の日本語、また日本の社会や学校の特有の文化と折り合いをつけるのか。日本語習得上の「言語化」だけではなく、第二言語としての日本語を学ぶ上での、多言語・多文化の接触による受容、つまり、言語とアイデンティティの変化が起きるのではないだろうか。箕浦(2003)は、子どもの異文化体験に関わる要素について、現地に同化するプロセスと滞在年数とを結びつけ、その中でも異文化体験が子ども自身のアイデンティティにも関わってくることを示唆している。また、二言語を使うバイリンガル児童の場合、自分を取り巻く地域社会の中で自分の話す母語と第二言語がどのように評価されるのか、周りの人の言語に対する態度が言語を学ぶ動機に関わると指摘されている(Baker 1992)。本研究では、児童期にある子どもが日本語を第二言語として学ぶと同時に、日本語という新たな言語の、社会的なアイデンティティをも身に纏うことになると仮定した。

(5) バイリンガル児の言語教育と言語環境

しかし、目に見えないこのような異文化体験

や第二言語習得上の言語化、或いは、社会化、また、個人の言語習得に関わるアイデンティティは、言語を身につける当事者である子どもにだけでなく、親や教員、学校関係者にも意識化されず、また、理解されにくいものである。子どもの周りの親と学校教育の現場、つまり大人の視点に立つと、ホスト社会の学校に早く適応する、つまり同化することが子どもの利点となると思いこむ傾向があるため（藤田ラウンド2008）、第二言語の日本語を身につけ、使えるようになること自体は理解されるが、一方で第二言語を身につける子どもに対して、日本語を学び、教育を受けることが結果としてどのような意味をもたらすのか、可視化できない言語アイデンティティの役割については、当事者の子どもを含めその周りの人たちにも意識化されにくい。当事者自身さえ、見通せない社会言語の言語化や社会化は、来日時、出身国、家族の経済状況などの子ども個人に関わる属性や子ども自身の資質にも関わることから、外（親や学校）から「評価」することは難しい。従って、学校教育のように、子どもに関する外からの評価が必要な場合は、子どもたちの「言語能力」の部分に大人の関心が向けられるのだろう。例えば、日本国内の外国をルーツに持つ子どもたちをめぐる日本語教育について、「年少者日本語教育」や「バイリンガル教育」として、カナダのイメージ教育モデルやオーストラリアのESL（第二言語としての英語）教育（川上 2011；中島他 2011）などの海外のモデルを参考にした、言語教育の評価や基準のための先行研究がある。これは、日本の学校教育現場の側にとって、有効な参考となる物差しとなる可能性を持つ一方で、「日本語教育」という文脈における言語習得と子ども「個人」の複数言語話者を考える場合、他の国のモデルであるという文脈を十分に理解の上で、現場に照らして改良を加えない限り、包括的に第二言語（または外国語）となる日本語を包括的に測ることは難しいままだろう。複数言語話者に関しては、個人の可変的要素が大きいため、一つのモデルや基準が絶対的となりにくいのが実情である（Baker, 2003）。本研究では、新宿区（地域コミュニティ）を背景とし、第二言語としての日本語を身につける子ども（個人の言語アイデンティティ）の言語の習得とアイデンティティを基盤としながら、「多文化共生」の内実を考える。具体的には、新宿区との比較の視座として、「千代田区」の「スペイン語母語維持教室」、「沖縄県宮古島市」の「消滅危機言語と捉えられている宮古語」のフィールド調査を行い、子どもの言語アイデンティティ、言語に関する意識を質的に調査し、多文化共生を問い直すことにした。

<引用文献>

Baker, C., *Attitudes and language*, Clevedon: Multilingual Matters, 1992

Baker, C., J. Dewaele, A. Housen, and Li Wei (eds.) *Language planning: a grounded approach*, *Bilingualism: beyond basic principles*, 2003

藤田ラウンド幸世、第7章新宿区で学びマルチリンガルとなる子どもたち、川村千鶴子編著『「移民国家日本」と多文化共生論』、東京：明石書店、2008、191-228

藤田ラウンド幸世、新宿区で学びバイリンガルとなる子どもたち 第二言語として日本語を学ぶ子どもへの日本語初期指導、*Educational Studies Vol. 52*, International Christian University、Institute for Educational Research and Service、2010、179-189

Fujita-Round, S., *The Story of Young Jae: A Sociolinguistic Study of a Korean School Age Sojourner and Bilingualism in Education in Shinjuku*, Tokyo: Unpublished Ph.D. Dissertation, International Christian University, 2011

川上郁雄、文部科学省定住外国人の教育等に関する政策懇談会用資料、http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/kokusai/008/shiryou/1292162.htm、2011

川村千鶴子、『「移民国家日本」と多文化共生論』、東京：明石書店、2008

箕浦康子、『子どもの異文化体験』増補版、東京：新思索社、2003

中島和子、『マルチリンガル教育への招待』、東京：ひつじ書房、2011

2. 研究の目的

(1) 「多文化共生」の概念を読み解くために先行研究に当たる。多文化共生という「ことば」は自治体や国レベルで多文化共生の実践を指すことも多く、さまざまな広がりを持つ概念である。そのために、「多文化」と「共生」に分け、既存の先行研究を洗い出す。

(2) 多文化・多言語が広がる新宿区での「多文化共生」の現状を、マクロ（人口動態と言語景観）とミクロ（JSL 児童の言語習得と言語景観）から調査を行う。

(3) (2)と比較検討をするため、千代田区のスペイン語母語維持教室と沖縄県宮古島市の消滅危機言語とされる宮古語の現存する学校において言語アイデンティティに関わる調査を行う。

(4) 近代社会における、共時的な、言語に関わる問題意識として、言語アイデンティティと多文化共生の問題を(2)と(3)を組み合わせて考察する。

3. 研究の方法

(1) (2)の(1)は多文化共生に関わる先行研究の文献調査を行う。筆者の研究の基盤となっている大学図書館（立教大学・国際基督教大学）

国立国語研究所、CiNii データベースにて、日本国内の学術論文や学術書を中心に、多文化共生、多文化、共生をキーワードにし、文献解題を行う。

(2) 2 の(2)と(3)は共に質的研究のフィールドワーク調査を行った。新宿区全般、千代田区内カトリック教会内のスペイン語母語維持教室(研究協力者の Perez=Murillo のプロジェクト)、沖縄県宮古島市立 H 小学校・中学校での特別授業(2012 年度共同研究者の善元幸夫との協働プロジェクト)、また、宮古島市立 H 小中学校での授業記録と子どもたちへのアンケート調査を行った。これらは、社会言語学・応用言語学の学問領域で発展をしている、言語のエスノグラフィー(Linguistic Ethnography)の手法をとっている。2 の(3)においては、特にフィールドワーク調査の参与観察だけではなく、アクション・リサーチとして、「教育」の支援という形で教育のコミット(アクション)を現場で行う形をとった。

4. 研究成果

(1) 理念としての「多文化共生」は、一枚岩ではなく、多文化を背景として持つ様々な「個人」の立場、その人を支えている「現場」、また、それぞれの「学問領域」よって独自の文脈の中での解釈がなされていることがわかった。従って、一つの静的な現象や事実を理論やシステムとして捉えることは難しい。また、2014 年現在、「多文化」という定義そのものも揺らいでいる。1990 年の入国管理法改正に始まる「日系人」であるブラジルとペルーを中心とする、1990 年当時のニューカマーである「日系人」の出身国の国籍人口の急増からすでに 20 年が過ぎた。それ以前の「移民」という区分上のオールドカマーと比較の上で、ニューカマーと位置付けられたわけだが、その歴史を前提とした時間区分、つまりオールドカマーとニューカマー間の「境界」に対する 21 世紀の社会の「時間、もしくは歴史」に対する捉え方が明確ではなくなっていることも示唆された。ニューカマーが日本に新たな「多文化」を加えたこの 20 年間の間に、日本社会では経済界のバブル崩壊、世界に共通する 2008 年のリーマンショックという経済活動の急激な変化、さらに 2011 年に日本でおきた東日本大震災以降の大規模な社会的変化があった。移動をする人たちが引きつけられる「経済」そのものの変動により、確実に「外国籍住民」のコミュニティの中でも変化が生じている。「多文化」を取り巻く人や家族、コミュニティといった「個人」単位のミクロレベルでも、このような変動に左右され、マクロとミクロの密接な関係が文脈を作りだしており、この文脈は常に動的であることが 21 世紀に入った日本の社会の中でも見てとれた。それゆえに、「多文化」に関わる個人やコミュニティに関わる各々の

解釈にも、様々なレベルの変化が常に影響をしていることから、どの「時間的区分」での「多文化」を語るかにより「時間的」再解釈さえ加わってくる。

本研究のテーマである多文化共生を、「多文化」と「共生」と区別して捉えたとき、この二つの概念のどちらが強調されるのかによっても、「多文化共生」の軸は自ずから異なることがわかった。「多文化」の側面が強調される場合は、多文化主義(multiculturalism)とも考えられる「文化」が複数、同等に並列したそのバランスや公正さ(equity)が問われ、「共生」が強調される場合は、生物学の共生(symbiosis)や「共に生きる」という行動(living together)、また「共に愉しむ」という行為(conviviality)など、「共生」の主体の行動や行為が範疇に入る。さらに、「多文化共生」の主体を描写するのではなく、客体として外側から眺めるのならば、一つの「多文化共生(co-existence)」という概念化された状況(conceptualization)となり、視点のポジションによってもさまざまな見方が可能となる。

現在の「多文化共生」の概念を、2014 年 9 月に行った「多文化共生を再考する——学際的な視点から」のシンポジウムで 4 名の先生方の視点で見ていただき、その講演録を国際基督教大学教育研究所のモノグラフとしてまとめている。シンポジウムの講演は、科学研究の報告用のプラットフォームであるウェブサイト上の YouTube においても閲覧、参照できるようにした。(Live Multilingually <http://www.multilingually.jp>).

(2) 新宿区に関しては、雑誌論文、学会発表、 、 、 、 があり、加えて、新宿区多文化共生課が主催する「新宿区街づくり会議」の学識経験者として 2012 年 9 月-2014 年 8 月まで参加をし、会議の中で学齢期の子ども部会に属した(<http://www.city.shinjuku.lg.jp/content/000120115.pdf>)。この会議録をまとめ、分析する研究はこれから行う予定である。藤田ラウンド(2010、2011)の成果を会議の中で提供し、2014 年 8 月に行った区長への答申の中に、「外国につながる子どもたちの母語と母文化の尊重」という項目を出すことがこの科研の成果としても挙げられるだろう(<http://www.city.shinjuku.lg.jp/content/000159426.pdf>)。

(3) の千代田区における調査に関しては、Perez=Murillo との学会発表を 2014 年 6 月に、そして 2015 年 6 月(香港大学、中国・コロンビア大学、ポルトガル)、9 月(バーミング大学)に行い、2016 年 3 月に 2 本の論文、また Perez=Murillo が本の 1 章を執筆が決定している。宮古島調査においては、雑誌論文、学会発表、 、 、 また、2015 年 7 月 NGO, Linguapax International への報告のデジタルサイトで 1 本掲載予定であり、2016 年に論

文を1本投稿予定である。

(4)に関しては、2014年9月に2日間に亘りシンポジウムを行い、その成果を図書としてまとめている。

本科学研究のテーマは、引き続き2015-2017年度の「日本のマルチリンガリズムの総合的研究：多文化共生につながる教育を求めて」においても継続して、問い続ける。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計2件)

藤田ラウンド幸世、学校教育の中で言語継承への気づきを育てる 沖縄県宮古島市での自尊感情につながる教育実践、教育研究、Vol. 57、2015、175-182、査読無

Fujita-Round, S.、The Language Development of a JSL Schoolchild: Analyzing the Linguistic Ethnography of Young Jae, a Korean/Japanese Bilingual、Educational Studies、International Christian University、Vol.55、2013、189-201、査読無

[学会発表](計9件)

Fujita-Round, S.、Why can't I read our Miyako history in our textbook?、Foundations of Endangered Languages、Okinawa International University、Ginowan-shi、Okinawa-ken、19th September、2014

Fujita-Round, S. & Perez=Murillo, M.D.、Raising children bilingually in community: Two case studies of literacy practices in Tokyo、Sociolinguistics Symposium 20、University of Jyväskylä、Jyväskylä City、Finland、17th June、2014

Fujita-Round, S.、Negotiating language ideologies in the JSL classroom: analysis of social role of JSL teacher's discourse、International Union of Anthropological and Ethnological Sciences、Makuhari Messe、Makuhari City、Chiba Prefecture、17th May、2014

藤田ラウンド幸世、自尊感情につながる対話型授業 -教師が問いかけるローカル・アイデンティティ、日本国際理解教育学会、広島経済大学、広島県広島市、2013年7月6日

藤田ラウンド幸世、ことばの四技能から『対話』を捉え直す――鼎談『対話が拓くグローバルゼーション』、秋田大学教育学部附属小学校公開研究協議会(招待

講演) 秋田大学教育学部附属小学校、秋田県秋田市、2013年6月14日

Fujita-Round, S.、Becoming Korean/Japanese bilingual through interaction ---The ethnographic case study of Young Jae, a school age sojourner in Shinjuku、第13回韓国国際理解教育学会大会・京仁教育大学校(韓国、インチョン市)、2012年11月10日
Fujita-Round, S.、The Story of Young Jae: a Sociolinguistic Study of a Korean School Age Sojourner in Tokyo、45th Annual Meeting of the British Association for Applied Linguistics、University of Southampton、Southampton、UK、7th September、2012

藤田ラウンド幸世、フィールドワークからバイリンガルの子どもの第二言語習得を描く：エスノグラフィーという研究方法の考察、2012年度母語・継承語・バイリンガル教育(MHB)研究会大会・桜美林大学、東京都町田市、2012年8月6日
藤田ラウンド幸世、『新宿のニューカマー 韓国人のライフヒストリー記録集作成』の教育現場での応用 対話を前提とした他者理解に向けたレッスン、日本国際理解教育学会第22回大会、埼玉大学、埼玉県さいたま市、2012年7月15日

[図書](計2件)

藤田ラウンド幸世(編著)、国際基督教大学教育研究所(IERSモノグラフシリーズ2)、多文化共生を再考する -学際的な視点から、2015年7月予定
藤田ラウンド幸世、明石書店、国際結婚家族で母語を身につけるバイリンガル、多文化共生論、2013、149-173

[その他]

ホームページ

「多文化共生を再考する/
Live Multilingually」

<http://multilingually.jp>

シンポジウム主催

多文化共生を再考する 学際的な視点から、国際基督教大学、東ヶ崎潔記念ダイアログハウス2階国際会議場、第一日目：9月7日(日)13:00-16:30
「異文化と第二言語を軸に子ども期のアイデンティティを問い直す」、第二日目：9月14日(日)13:00-16:30「歴史と時間を軸に多文化・多言語のあり方を問い直す」

招待授業

藤田ラウンド幸世(2014)「二言語・二文化で育つ国際結婚家族の子どもたち：国際結婚家族のバイリンガリズムとアイデンティティ」お茶の水女子大学『多文化

共生論』公開授業、2014年11月27日
招待授業

藤田ラウンド幸世(2013)「二言語・二文化で育つ国際結婚家族の子どもたち：国際結婚家族のバイリンガリズムとアイデンティティ」お茶の水女子大学『多文化共生論』公開授業、2013年11月14日
日西バイリンガルの親に向けた講義
藤田ラウンド幸世「日本語・スペイン語バイリンガルを育てる親御さんに向けて(スペイン語通訳付き)」千代田区イグナチア教会、2014年4月26日

6. 研究組織

(1) 研究代表者

藤田ラウンド 幸世 (FUJITA-ROUND, Sachiyo) (立教大学・異文化コミュニケーション研究科・特任准教授)
研究者番号：60383535

(2) 研究分担者 (2012年度のみ)

善元 幸夫 (YOSHIMOTO, Yukio) (琉球大学・教育学部・兼任講師)
研究者番号：40587739

(3) 連携研究者 なし

(4) 研究協力者

マリア・D. ペレス=ムリリョ (PEREZ=MURILLO, Maria) (スペイン国コンベルテンセ大学・教育学部・教授)

服部 勝孝 (HATTORI, Katsuyuki) (映像アーティスト)

松崎 実穂 (MATSUZAKI, Miho) (国際基督教大学・ジェンダー研究センター・助手)

佐藤 博昭 (SATO, Hiroaki) (映像作家)

吉田 匡 (YOSHIDA, Masashi) (国際基督教大学・教養学部・4年)

堀 真吾 (HORI, Shingo) (国際基督教大学・ジェンダー研究センター・助手)

石川 紗愛 (ISHIKAWA, Sae) (国際基督教大学・教養学部・3年)

ゲレロ=マルリシオ ホセ・カルロス (Jose Carlos GUERRERO MAURICIO) (国際基督教大学・教養学部3年)

楠田 健太 (KUSUDA, Kenta) (JICA・日系社会青年ボランティア)

磯田 好美 (ISODA, Yoshimi) (JICA・日系社会青年ボランティア)

軽部 貴久子 (KARUBE, Kikuko) (JICA・日系社会青年ボランティア)

角浜 ひとみ (KAKUHAMA, Hitomi) (JICA・日系社会青年ボランティア)

田中 康予 (TANAKA, Yasuyo) (JICA・日系社会青年ボランティア)

岡田 宏太 (OKADA, Kota) (JICA・日系社会青年ボランティア)

古泉 志保 (KOIZUMI, Shiho) (元JICA・青年海外協力隊)

後藤 あずさ (GOTO, Azusa) (神奈川大学・英米文学科・4年)

アウドリュス サブーナス (SABUNAS, Audrius) (元国際基督教大学・短期留学生)

王 静華 (WANG, Jinghua) (国際基督教大学・教養学部4年生)

谷村 大樹 (TANIMURA, Hiroki) (国際基督教大学・教養学部4年生)

福原 学 (FUKUHARA, Gaku) (沖縄県宮古島市立池間中学校・教諭)

近藤 崇士 (KONDO, Takashi) (沖縄県教職員組合宮古支部書記長)

根路銘 和子 (NEROME, Kazuko) (沖縄県宮古島市久松小学校・校長)

平良 ヒロ子 (TAIRA, Hiroko) (沖縄県宮古島市久松中学校・校長)

平良 善信 (TAIRA, Yoshinobu) (沖縄県宮古島市久松中学校・校長)

垣花 秀明 (KAKIHANA, Hideaki) (沖縄県宮古島市久松中学校・教頭)

下地 勇 (SHIMOJI, Isamu) (シンガーソングライター・歌手)

松原 森久 (MATSUBARA, Morihisa) (宮古島漁業協同組合・漁師)

新里 博 (ARASATO, Hiroshi) (渋谷書言大学・主任講師)

新里 信子 (ARASATO, Nobuko) (渋谷書言大学・事務局長)